



修行嫌いの見習い魔導士を
エッチなお仕置きで
更生させる三日間

【目次】

プロローグ	 1
一日目『添い寝のお仕置き』	 5
二日目『口づけのお仕置き』	19
三日目『水浴びのお仕置き』	31
エピローグ	47

※体験版は一日目『添い寝のお仕置き』の途中までとなります。

プロローグ

深い森の奥。小さな泉のほとりに魔力を帯びた塔がそびえ立っている。

その塔の最上階、柔らかな陽の光が差し込む部屋で、セリカは魔力を練っていた。小柄で可愛らしい見た目とは裏腹に、その体の中には膨大な魔力を宿している。世界でも有数の大魔導士セリカ。

「さて、リーナの修行は順調かしら？」

セリカはこれまで弟子をとらない主義だったが、リーナだけは別だった。将来、大魔導士になれるほどのリーナの才能に惚れたから。というのは表向きの理由で、本当は自分に懐いてくるリーナが可愛かったからだが、そのことは誰にも言っていない。

セリカは窓を開け、練った魔力を広い森全体に行き渡らせてリーナの魔力を感知する。しかし。

「はぁ…やっぱり…」

リーナは修行をサボり、木陰でのんびり昼寝をしていた。才能は申し分ないのに、修行嫌いですぐにサボってしまう。

セリカはすぐにテレポートの魔法を詠唱する。足元に魔法陣が出現し、薄手のローブがふわりと浮かび上がると、次の瞬間にはリーナのもとにセリカの姿が現れていた。

「リーナ！」

セリカの声で目を覚ましたリーナは寝ぼけた様子で目をこすっている。

「ふぁ…？あ、セリカさん。どうしたんですか？」

「どうしたじゃないわよ！修行はどうしたの？」

「うーん…だって、修行よりお昼寝のほうが気持ちいいんですもん」

呑気にあくびをするリーナの口の端から涎が垂れる。

(なんて可愛らしい顔……じゃなくて)

「リーナ、あなたは本当にすごい才能を持っているのよ。ちゃんと修行を続ければ私に匹敵するかもしれないのに」

「セリカさんになれるんですか？嬉しいなあ」

リーナはまだ寝転がったまま、起き上がる気配もない。セリカは溜息を吐く。

「ちゃんと修行したらの話よ」

「明日からちゃんとやりますからあ。それより、セリカさんも一緒にお昼寝しましょうよ。ここ、お日様が当たって気持ちいいですよ」

反省するどころか怒られている自覚すらなく、リーナは再び目を閉じる。そんなリーナにとうとうセリカが業を煮やす。

(今まではリーナの可愛さに騙されてきたけど、今日という今日は心を鬼にしないと…)

「リーナ…」

セリカの声が一段低くなる。

「お仕置きが必要みたいね」

「ん？お仕置き？眠いので後でいいですかぁ？」

「寝たいのなら寝ても構わないわ。でも、私のお仕置きを受けながら眠れる魔導士なんて、世界中どこにもいないわよ？」

「ふーん…世界中…どこにも…」

セリカの言葉を寝ぼけた頭で復唱しただけで、リーナはまたむにゃむにゃと眠りに落ち始める。

一日目『添い寝のお仕置き』

爽やかな風に揺れる木の陰で、リーナは今にも寝息を立てそうなほど安らいだ顔をしている。

一度は決心したはずのセリカの心が揺れる。

(くう…こんな可愛い弟子に今からお仕置きをしないと
いけないなんて…)

リーナの才能を無駄にしないためにも、セリカには師匠としての責任があった。そんなセリカの頭に一つのアイデアが降りてくる。

(そうだ、リーナを愛でるのとお仕置き、両方同時にやればいいんだ)

気持ちよさそうな顔で横になるリーナの隣でセリカは自分も横になった。リーナの背中にぴったりと密着する。

「ふぁ？やっぱりセリカさんもお昼寝したかったんです

ね。いいですよ、一緒に寝ましょう」

リーナはもぞもぞと寝返りを打つと、セリカのほうに顔を向け、一つあくびをした。

(可愛すぎる！)

このままだと決心が鈍ってしまう。

「リーナ、ちょっとあっち向いてなさい」

「えー、セリカさんの顔見ながらお昼寝したいのに…」

「いいから」

セリカは強引に、もう一度リーナに寝返りを打たせる。

(ふう、これならなんとか…)

息遣いととともに上下に動くリーナの背中を見ながら、セリカは指に魔力を込め、リーナにそっと流し込む。

「ん？あれ？セリカさん、なんか体が変わです…動かない…」

「初級の拘束魔法よ。あなたがちゃんと修行してれば、これくらいの拘束は解けるはず」

「解けませんよお。セリカさん、解いてください」

体を拘束されてもなお、リーナに危機感はまったくくない。

「お仕置きなんだから解くはずないでしょ」

「えー、いじわるう…」

「大丈夫よ、ちょっと可愛がってあげるだけだから」

セリカは後ろからリーナを抱きしめる。脚が絡みつき、胸が背中に当たる。

「うわぁ、セリカさんの体、あったかくて気持ちいい」

「ふふっ、これからもっと気持ちよくしてあげる」

セリカはリーナの首筋に顔をすりつけ、ふうー、と吐息を吹きかける。

「ひゃう！」

※体験版はここまでとなります。

続きは本編でお楽しみいただけると幸いです。